

## 姚合の詩について——中唐期における新しい個性として——

玉城 要

### はじめに

中唐末期を中心に活動した詩人姚合は、賈島と共にしばしば「姚・賈」と称せられ、現存する作品は唐代詩人中比較的多作の五百三十数首を数える。多数の詩人との間に詩の応酬があり、同時代の韓愈の集団、元稹・白居易らの集団とは異なる文学集団を形成し、その中心的役割を果たしていたと言われる。

筆者の知る限り、中国大陸、台湾における従来の姚合研究は、ほとんど姚合の伝記究明に終始しており、作品への具体的な言及は少なく、姚合を賈島の亜流とする認識が一般的である。

筆者は、相当数の作品と知名度を持つ姚合を、単に賈島の亜流・追隨者として片付けることにはいささか疑問を感じる。姚合と賈島の両者の間に優劣をつけるというのではなく、相互に影響し高め合う関係としてとらえ、その共通す

る面を認識した上で、姚・賈の差異、あるいは姚合の個性が何であるのかを吟味することが、より建設的な作業と思われる。本稿は、賈島・孟郊らとの比較を通して、中唐期における姚合という詩人の新しい個性について考察するものである。

### 一 姚・賈を結び付けるもの

まずはじめに、姚合と賈島の共通面について確認したい。姚・賈を併せて論じることには、唐末張為の『詩人主客図』にすでに見える。張為は、姚合と賈島を『清奇雅正』目に入れ、姚合を「入室」、賈島を「升堂」としている。『清奇雅正』目に配せられた詩人は二十七人を数え、『詩人主客図』六目の中で最も多い。また彼らはみな、姚合・賈島と同様に五言律詩の作品を多数有する。中晚唐期になり、律詩、特に五言律詩の制作が急速に増加し、多くの詩人たちに愛好されるようになったことを考慮に入れるならば、張

為の設定した『清奇雅正』目は、まさにその風潮を反映したものと見えよう。清奇雅正とは、俗気がなく斬新であり、雅やかで正統的な詩風、と考えられるが、ここで言う「正統」とは、当時の主流という意味でとらえてよからう。張為は、五言律詩を多作するという点と、それらの詩が清雅新奇な趣を持つという二点に、姚合と賈島の共通性を見出している。

時代は下り、南宋の嚴羽は、姚合・賈島を宗と仰ぐ永嘉四靈および江湖派の詩を否定する文脈で、「近世趙紫芝・翁靈舒輩、獨喜賈島姚合之詩、稍稍復就清苦之風、江湖詩人多效其體」(近世趙紫芝・翁靈舒の輩、独り賈島・姚合の詩を喜び、稍稍復た清苦の風に就く。江湖の詩人多く其の体に効う)『滄浪詩話・詩弁』と述べている。永嘉四靈および江湖派の詩人は姚合・賈島の清苦な詩風を好んだということだろうが、ここで注意すべきことは、姚・賈の詩風が「清苦」としてとらえられている点である。本来清苦とは、清廉潔白で困苦に耐えるということである。生活面の困窮を言うならば、姚合・賈島は確かにある意味で共通する<sup>四</sup>。しかし、嚴羽は単純に、姚合と賈島の困窮した生活に注目して、彼らの詩風を「清苦」と見なしたわけではなからう。同じく南宋の劉克莊は、姚合と賈島について「姚・賈は律に縛せ

られ、俱に辺幅に苦しむ」(後村先生大全集)卷一〇一題跋、程垣詩卷)と述べている。劉克莊の言う「苦」とは、明らかに詩作における苦しみ、苦吟の姿勢を意味していると思われる。恐らく、嚴羽の説く清苦の「苦」も、生活面の困苦とは別に、詩作上の辛苦という意味合いを持つ言葉と考えていいだろう。ここに、姚合と賈島を「苦吟」という点から括る見方が現れ、以後、苦吟型の詩人として姚合と賈島は一まとめにして評されていく。

清代に至り、四庫館臣は姚合の詩風を評して「刻意苦吟、冥搜物象、務求古人體貌所未到」(四庫全書總目)卷一五一「姚少監詩集提要」と言い、また『極玄集提要』でも「合爲詩刻意苦吟、工於點綴小景、搜求新意。而刻畫太甚、流於纖仄者、交復不少」と述べている。「務求古人體貌所未到」や「搜求新意」の評語は、張為の言う、斬新という意味での「清奇」の「奇」を意識したものであろう。また、「工於點綴小景」や「流於纖仄者」の評語は、元初の方面の「姚の詩専ら小結裏に在り」に始まる、姚合が詩に描く世界の視野の狭さと、氣象の小ささについての指摘を受けたものと思われる<sup>五</sup>。

姚合と賈島の接点は、俗気がなく斬新な詩風ということにまず見出された。それが次第に専ら「苦吟」という点

から同一視されるようになり、やがては、方回らの言を受けて、姚合と賈島との間に優劣をつけて評するようになって来たと考えられる。人々の芸術的嗜好や審美基準といったものは時代の推移によって変化するものであるし、この種の変化は、時として非常に大きい。したがって前人の審美判断は、後人にとって時に理解しがたいものとなる。しかし、ある一面を過度に注視するが故に、前人の意見を無批判に受け入れてしまい、偏った評価を下してしまうこともまた否めない。筆者は、従来の姚合に対する認識も、「苦吟」という言葉に拘泥しすぎる、偏ったものと考ええる。以下に、単なる「苦吟」という詩作態度だけでなく、姚・賈の詩作への取り組み方全般を視野に入れて、姚合の独自性を浮き彫りにしてみたい。

## 二 詩作へのこだわり―官職との関わりを通じて

ここでは、姚合・賈島が官職と詩作へどのように関わっているのか、という観点から、彼らの相違点を考えてみたい。詩作することそれ自体を詩の主題、あるいは素材として詩に詠ずることは、杜甫の作品中にすでに見られ、また姚合や賈島に限らず、孟郊・李賀などの一群の中唐詩人に共通する現象であり、しばしば「苦吟」や「閑吟」という

言葉によって象徴される。<sup>六</sup>

賈島・孟郊らの作品中で、詩作について言及したものとして、「蟬の吟ずる吾れ為に聞くも、吾れの歌う蟬豈に聞かんや」(賈島「寄劉棲楚」)、「默默として朝夕空しく、苦吟誰か聞くを喜ばん」(同「秋暮」)、「悪しき詩は皆官を得、好き詩は空しく山を抱く」(孟郊「懷惱」)、「一生空しく詩を吟ず、覚えす白頭と成るを」(同「送盧郎中汀」)などがあげられる。彼らの詩作への言及はこれだけに限られるわけではないが、これら数例の中に、彼らの詩作に関する基本的な考え方が見て取れる。賈島や孟郊は、自分の詩を喜んで聞く者が無く、優れた詩のために却って社会からは疎まれ、空しく詩を詠み続けて老いさらばえて行く、と言うように、概して詩作する自己あるいは詩人を、否定的あるいは自虐的にとらえているように思われる。<sup>七</sup>これは、賈島・孟郊らが共に生涯官途の面において不遇であったことと関係しているだろう。聞一多は「賈島」で、官職と詩作について言及しているが、それを要約すると「官職についていない年若い知識人は詩を作るほかにすることがなく、同時にそれが唯一の出世街道だった。万一作った詩が規格外であるか、詩に問題がなくてもその人の運が悪ければ、一生涯詩を作り続けているしかない。賈島こそ正にこの異様な

制度の犠牲だった」ということになる。<sup>八</sup>

官職を得て世に出んがために詩作に励む。しかし、そのうたう歌は他人から排せられ、プライドは傷つけられる。かといって詩作をあきらめることは、同時に官途の夢を放棄することを意味する。事はこれほど単純ではなかったにせよ、賈島や孟郊らは、理想と現実とのギャップと、そこに潜む矛盾に気づきながらも、堂々巡りを繰り返し、結局詩作にのめり込むしかなかったと思われる。

それでは、姚合の場合はどうだろう。元和十一年、進士及第を果たした姚合は、武功県主簿を皮切りに役人生活のスタートを切った。当時の五言律詩の連作『武功縣中作三十首』は、姚合の代表作としてしばしば取上げられるが、我々はその中に、姚合の官途に対する考え方や、彼の性情をうかがい知ることができる。

例えば姚合は、「方に拙し 天然の性、官と為るも是れ事に疏し」(『武功縣中作三十首、其二』)、「自ら知る狂僻の性、吏事固より相疏んず」(『武功縣中作三十首、其二十九』)のよう、自身の性質が拙にして狂僻であり、官職にあるが世事には疎く、公務を煩わしく思う、ということを頻りにうたう。さらに、「身を養うを好事と成し、此の外更に空虚なり」(『武功縣中作三十首、其二』)、「早く帰林の計を作し、深

く居りて此の身を養わん」(『武功縣中作三十首、其三』)、「閑を愛して病飯を求め、酔に因りて官方を棄つ」(『武功縣中作三十首、其七』)、「長く憶う青山の下、深く居りて性情を遂ぐるを」(『武功縣中作三十首、其二十八』)とうたうように、役人生活に別れを告げ、静穏な場所を身を養って生きることへの願望を表明している。無論、詩人の真実の姿が、常にその作品に投影されているとは限らないし、詩的虚構ということも想定する必要がある。しかし、斯くも頻繁に官途に対して恬淡な様子を描くということは、姚合の関心が、官途よりも私生活の充足に向けられていたことを十分に裏付けるものと考えられる。

また、姚合は自身の官を表現する際、「官卑くして長に事少なく、県僻にして又た城無し」(『遊春十二首、其二』)の如く、しばしば「卑」「小」「微」などのマイナスイメージの言葉と結び付ける傾向がある。「官卑」「県僻」などの言葉は、詩人が謙遜を表す場合に用いられるのが一般的であり、時として、謙遜とは別に詩人の現状に対する不満の意を内包するものでもあろう。しかし「卑官還って悪しからず、行止逍遙を得たり」(『遊春十二首、其十七』)、「生を養うに宜しく県は僻なるべし、品を説くに官の微なるを喜ぶ」(『武功縣中作三十首、其二十二』)といったうたいぶりや、先

述した姚合の官途に対する恬淡な様子と照合すれば、これら「卑官」「小官」「微官」「鼎僻」は、貧しい生活や不遇感を想起させるものではなく、むしろ姚合にとって自由な時間というプラス要素をもたらすきっかけとして表現されている、と見るべきであろう。

さて、自由な時間を獲得した姚合は、詩作とどのように関わっていくのか。次の詩を見てみよう。

### 山居寄友人

獨在山阿裏 独り山阿の裏に在り

朝朝遂性情 朝朝 性情を遂ぐ

曉泉和雨落 曉泉 雨に和して落ち

秋艸上牆生 秋草 牆に上がりて生ず

因客始沽酒 客に因って始めて酒を沽い

借書方到城 書を借りんとして方めて城に到る

詩情聊自遣 詩情 聊か自ら遣る

不是趁聲名 是れ声名を趁うにあらず

姚合を取り巻くのは、静穩で冷冷とした空間である。彼にとって愛すべきは斯かる生活空間であり、その中の詩作行為は自らひととき憂さをはらし、性を養うためのものであって、決して世俗的な名声を得るための手段ではない。

### 閑居晚夏

閑居無事擾 閑居 事の擾り無く

舊病亦多痊 旧病 亦多く痊愈

選字詩中老 字を選んでは詩中に老い

看山屋外眠 山を看ては屋外に眠る

片霞侵落日 片霞 落日を侵し

繁葉咽鳴蟬 繁葉 鳴蟬咽ぶ

對此心還樂 此れに対すれば心は還た樂し

誰知乏配錢 誰か知らん酒錢の乏しきを

静穩な空間、自由な時間の中、旧來の病は自然に癒えていく。閑居は、姚合に私的生活の充足を実現させる空間なのである。その中において詩作に関わっていく自身の姿を、姚合は「選字詩中老」即ち、「詩にふさわしい表現を摸索しているうちに、いつのまにか老いていく」と表現している。「山居寄友人」詩にうたうように、姚合にとって詩作が性を養うものであったならば、「詩中に老い」といふこととは、自己の性情を遂げつつ、老いを忘れるほど、詩作に没頭することを意味している。よりよい表現を追求せんがために「字を選び」、詩作に腐心することは、確かにある種の苦痛を伴うものである。しかし、姚合にとってそれは心地よい苦痛ではなかつただろうか。

賈島や孟郊は、先述の如く、報われることの無い空しい  
營為のうちには老いさらばえていく、とうたつた。詩作と関  
わりながら「老い」ていく点では、姚合と何ら変わるこ  
ろはない。しかし、詩作が己を傷つけ、苦しみ、否定する  
ものであると認識しながらも、それを続けざるを得ない賈  
島や孟郊と、詩作が己に生きる喜びを与えるものと認識  
し、自ら進んで詩作にのめり込む姚合とは、同じ詩作へ  
のこだわりといってもその意味するところは大き異なるの  
である。

### 三 姚合の描く空間——狭小な視野とありふれた日常

前節では、姚合が官途に恬淡で、私的生活の充足に価値  
を見出し、詩作に没頭することを述べた。ここでは、姚合  
詩に頻出するいくつかの言葉をてがかりに、彼が描き続け  
る空間の特徴と、その意味について考察したい。次の詩を  
見てみよう。

萬年縣中雨夜會宿寄皇甫旬 一 万年縣中雨夜會宿して  
皇甫旬に寄す

縣齋還寂寞 泉齋 還た寂寞  
夕雨洗蒼苔 夕雨 蒼苔を洗う  
清氣燈微潤 清氣 燈 微かに潤い

寒聲竹共來 寒声 竹と共に來る

蟲移上階近 虫は移り 階に上って近づき

客起到門迴 客は起ち 門に到って廻る

想得吟詩處 想い得たり吟詩の処

唯應對酒杯 唯だ応に酒杯に対すべし

夕暮れ時の静寂な泉齋が詩の舞台である。降りしきる雨  
は、苔の埃を洗い清め、竹の葉を鳴らす雨音は、涼気を伴  
って室内へ入り込む。虫は雨を避けて階にのぼり、客は立  
ちあがると入り口の辺りを歩き回りながら、雨を見遣って  
いる。詩には、何の変哲もない雨の夕暮れ時の様子が展開  
されている。一句目と三句目にそれぞれ、「寂寞」「清氣」  
と見えるように、姚合の詩に描かれる詩人を取り囲む空間  
は、「静」「清」「幽」「暗」などの言葉によって象徴される  
ことが多い。また「夕雨」の如く、「雨」「泉」「池」「露」  
など、水に関わる事柄がしばしば用いられる。これらは、  
冷やかさと同時に、清浄さを連想させるものである。静  
穩・冷暗・清浄な空間を描写することは、賈島の詩にもか  
なりの部分で共通している。姚合・賈島の両者が、僧侶と  
頻繁に交流していたのは周知のことだが、僧侶との交わり  
も、姚合・賈島が斯かる空間を好んで描くことと何らかの  
関係があるだろう。また、張為が「俗氣が無い」という点

に姚合と賈島の共通性を認めたのは、彼らが詩に描き出す  
このような空間に注目したからではなかっただろうか。

次の詩は、姚合が杭州刺史の任に当っていた当時によま  
れたものと推定され、そこに展開される空間も「萬年縣中  
雨夜會宿寄皇甫旬」詩とほぼ同じ様相を呈している。

杭州官舎即事

臨江府署清 江に臨み府署清し

閑臥復閑行 閑臥復た閑行

苔蘚疏塵色 苔蘚 塵色を疏い

梧桐出雨聲 梧桐 雨声を出す

漸除身外事 漸く身外の事を除き

暗作道家名 暗に道家の名を作す

更喜仙山近 更に喜ぶ仙山の近くして

庭前藥自生 庭前 藥自ずから生ずるを

詩題に見える「官舎」は、州県の刺史や県令のために治  
所に立てられた、いわゆる「郡齋」「県齋」と呼ばれるも  
のである。郡齋や県齋は公府として政務を執る場所である  
と同時に、県令や刺史の私的な居住空間でもあった。川縁  
に建つ官舎は、あたかも河水に洗われたかのような、清浄  
な佇まいを見せている。姚合は室内に悠々と横たわって、  
梧桐の葉をぬらす雨の心地よい響きに耳を傾け、庭先をそ

ぞろ歩きしては、塵埃を洗い落とした苔の美しい青さに目  
を留める。姚合は、清浄・閑静な空間に身をおいて、ひと  
とき身辺の瑣事を忘れていく。詩の後半に連続して現れ  
る、「道家」「仙山」「藥」などの言葉に、人知れず穩者然  
とした生活を享受する姚合の姿がうかがえよう。杭州刺史  
といえ、その品階はかなり上位にランクされ、政治的実  
権も相当なものであったと推測される。しかし、詩中に登  
場する姚合は、官途に就いた当初と変わることなく、公職  
の煩わしさを意識的に避け、私的生活の充足を追求してい  
るように見受けられる。

さて、この詩の三句目にも「苔蘚」とあるように、姚合  
の詩に頻出するのは、「萬年縣中雨夜會宿寄皇甫旬」詩二  
句目の「蒼苔」や、五句目の「蟲」といった、蛭、螢、蝶、  
苔、蘚などの微細な昆虫や植物である。このように微細な  
物へ目をむけ、それを繰り返し描写するのも、姚合・賈島  
に共通する姿勢である。しかし、同じく微細な物へ目をむ  
けるとは言っても、両者の好みや描き出す世界には、大き  
な違いがある。賈島の詩に描かれる微細な物の特徴につい  
て、いくつかの例をあげて見てみよう。

歸吏封宵鑰 歸吏は宵鑰を封じ

行蛇入古桐 行蛇は古桐に入る（題長江）

亂山秋木穴 亂山 秋木の穴

裏有靈蛇藏 裏に靈蛇の藏るる有り〔贈僧〕

廢館秋螢出 廢館 秋螢出で

空城寒雨來 空城 寒雨來る〔泥陽館〕

螢從枯樹出 螢は枯樹より出で

螢入破階藏 螢は破れし階に入りて藏る〔寄胡遇〕

濕苔黏樹癭 濕苔 樹癭に黏り

瀑布濺房菴 瀑布 房菴に濺ぐ〔寄魏少府〕

賈島の目に留まるのは、穴ぐらに潜む蛇であり、壊れかけた建物や朽ちかけた木の周りを、怪しげな光を放って飛ぶ螢であり、じっとり粘りつく苔である。賈島は微細な物を描くにしても、より奇怪で病的な物、粘着質な物に執着する傾向があるといえる。芦立一郎氏は、賈島のこれらの表現が、「奇怪なあるいは不快な印象を与え」、「感情的情緒的対応を抑制しつつ淡々と不快な対象を詩に取り上げ」、「冷静なグロテスク」であることが多いということを指摘している。<sup>二三</sup>確かに、同じ水気を帯びた苔を描く時、姚合は埃が洗い流された清らかさや青さに注目し、賈島は木の瘤に纏いつくじめじめとした点に目を向けている。また石段と虫を取り合わせて表現するにしても、賈島は壊れた石段の隙間を設定し、そこに入り込む陰湿な形象としてコオロ

ギを登場させる。賈島のこれらの表現が、姚合のそれとは異なり、我々に不快なイメージを想起させるのは明らかである。賈島の好む、これら微細な物が詩中に点ぜられる時、静寂の安寧は破られ、寒々と凍てつき枯渴した、非日常的な世界が出現する。これらの空間は、或いは賈島の精神世界の投影なのかもしれない。

姚合は、先述した四庫館臣の「工於點綴小景」という評語の如く、極めて卑近で狭小な視野に立脚して、己をとりまく空間を描いていく。先に取上げた二首の詩の場面設定からもわかるように、姚合が狭小な視野から見据えるのは、ごくありふれた日常空間である。最後に次の詩を見よう。

閑居遣懷十首 其五

永日厨煙絶 永日厨煙絶

何曾暫廢吟 何ぞ曾て暫く吟ずるを廢せん

閑詩隨思緝 閑詩思いに隨いて緝り

小配恣情斟 小酒情を恣ままして斟む

看月嫌松密 月を看ては松の密なるを嫌ひ

垂綸愛水深 綸を垂れては水の深きを愛す

世間多少事 世間多少の事ぞ

無事可關心 事として心に関るべきもの無し

煮炊きする火が厨房から消えて、もう随分長い。詩は姚合の貧しい現実生活、しかも厨房という極めて生活に密着した場所の描写から始まる。厨房に火の気の無いのは、ある意味で異常な状態であるかもしれない。しかし、二句目の「何曾暫廢吟」とあわせ見れば、「煙の絶えた厨房」という表現は、貧困の程度を誇張すると同時に、たとえ常識的に見て異常と思われる状況下にあっても、うたうことはやめないのだという、姚合の詩作へのこだわりを際立たせるための道具立てと考えられる。この詩に描かれるのは、貧困をもまるで意に介さず、気の向くままに酒を酌み、月を愛で、釣りに興じ、詩作に耽る、姚合の自由な日常生活であつて、決して貧困に喘ぐ姚合の姿ではない。「厨煙絶」という、本来マイナスイメージを喚起させる表現も、前節で述べた「卑官」等の言葉と同様に、姚合にとって、自由な時間あるいは精神の自由といったプラス面をもたらすものと言えよう。

このように、姚合はありふれた日常と、自己の満たされた私的空間<sup>二三</sup>、そして詩作する自己を淡々と描写し続ける<sup>二四</sup>。さて、姚合がいくら官途に対して恬淡な態度を示すとはいえ、官職が生活の基盤を保証するものである以上、それを真っ向から否定し、放棄できるわけが無い。実生活で

は、姚合も決して詩作だけに没頭していたのではなく、一方で政治的活動を続けていたにちがいない。役人としても、詩人として生きようとすることは、理念としては成立しても、実行に移すことは不可能なのである。詩人として生きる願いは実生活の上では実現し得ない。だからこそ姚合は、前節で取上げたいくつかの詩にも見られるように、せめて詩作する自身の姿を、その詩空間に投影し続けようとしたのではなかっただろうか。<sup>二五</sup> 付言すれば、姚合のかかる詩作態度は、詩作が俗世的な存在を超越したものだという文学意識、あるいは価値観の変転によるものと推測できよう。姚合の詩に描かれる狭小な日常空間は、言うなれば彼にとって詩人として自由に生きることが許された唯一の空間だったのである。

### おわりに

同時代に生きる、姚合と賈島が共通する側面を持ち、相互に影響し合っていたことは想像に難くない。しかし、彼らの歩いた道や背負っていたものが違う以上、その個性には自ずと違いが生じる。

詩人が同時に官僚であつたこの時代、彼らが政治に志すのは建前として必要なことである。そして、伝統的文学観

から言えば、詩とはまず政治や社会に資するものでなければならなかった。しかし、これまで見てきたように、姚合は、官職についた当初から私的空間の充足を第一義とし、本来建前として歌わなければならぬはずの、己の政治的抱負や社会状況を反映する詩を歌おうとはしなかった。<sup>一六</sup>彼は詩作に生きる喜びを感じ、詩人として生きる己を詩中に実現しようとしていたのである。これは伝統的儒家的文学観から脱皮し<sup>一七</sup>、詩作そのものに価値を見出そうという、姚合なりの営為だったと思われる。狭小な視点に立脚して日常生活を淡々と描写し、伝統的文学観にとられない姚合の詩作態度も、中唐期以降に生み出されていく様々な新しい価値観の一つであったと筆者は考える。

## 注

一 姚合の詩集は、『四部叢刊』所収影印明抄本『姚少監詩集』十卷(五〇八首)と、『全唐詩』姚合詩七卷とが比較的目的にしやすい。『全唐詩補編』『全唐詩外編』によって補うならば、現存する姚合の作品は五三六首を数える。本稿の姚合詩及び他の詩人の作品は『全唐詩』によった。

- 二 荒井健「賈島」『中国文学報』第十冊、一九五九、六八〜七〇頁、花房英樹「白居易研究」(世界思想社、一九七二)一八二〜一八六頁(一五)姚合贈答集團」を参照のこと。

三 姚合を賈島の亜流、あるいは追隨者と見なすのは、元初の方回『瀛奎律髓』卷十春日類における「遊春十二首」其九、其十についての、「姚少監合、初爲武加尉、有詩聲、世稱爲姚武功。與賈島同時而稍後、……詩亦一時新體也、而格卑於島、細巧則或過之」という評語あたりから始まるものと思われる。

四 賈島が終生科擧に合格できず貧窮したので対して、姚合は政治的実権はないが、秘書少監という比較的高官にまでなった。従って両者の後半生の命運には著しい差があると言える。しかし姚合も四十歳前後でやっと官途につき、その後も数年間僻界の小役人を務めていたわけだから、程度の差こそあれ、両者の前半生の境遇は幾分似通っていたと考えられる。

五 『瀛奎律髓』卷十春日類「遊春」詩評語。

六 「苦吟」については、岡田充博「中晚唐期に見られる詩文学への没頭の風潮について―詩人達の文学的自覚の問題を中心として」(『名古屋大学文学部研究論集』文学二六、一九八〇)に詳論がある。

七 芦立一郎「賈島詩試探」(『山形大学紀要』第十三卷第一号、一九九四)四二二頁参照。

八 『聞一多全集』卷六、唐詩編上「賈島」(湖北人民出版社、一九九三)参照。

九 閑居遣懷十首其八にも「業文隨日遣、不是爲求名」と見える。一〇 赤井益久氏は「郡齋詩について」(『国学院中国学会報』第四十二輯、一九九六)で、六朝期および初盛唐期から中唐期に及ぶ「郡齋詩」の変遷を考える上で、韋応物が重要な位置を占

めることを指摘し、「仕官の場である公府の典型『郡齋』『鼎齋』にあつて、隱逸と等しく世事と隔絶して精神の自由を標榜することは、処世観からいってきわめて斬新であつた」と述べている。さらに氏は、韋応物の郡齋詩が白居易の文学・処世観に影響を与えたと指摘している。俄かには断じ難いが、本文中の姚合の詩も、あるいは韋応物・白居易の線上に位置するものかも知れない。

一 蔣寅『大曆詩風』（上海古籍出版社、一九九二）第五章「時間与空間」に、大曆詩人が日常生活の描写に巧みで、瑣細な物象に注目していたこと、そして、彼らの詩風が姚・賈の一派を開くものであつたという指摘がある。

二 注七前掲芦立論文四〇八頁参照。

三 自己の日常や、満たされた私的空間を積極的に描写する詩人として、白居易があげられる。白居易の場合、江州左遷を契機に諷諭詩から閑適詩へと詩作の重心が移行していったが、姚合にはこのような変化は見られない、ここに両者の差異が見出せよう。

四 姚合は、他人の作品への批評や賞賛といった、社交辞令的なものを含め、その作品中で百数十カ所も詩作について言及している。中でも特徴的なものは、寒狭な物境と作詩嗜好とを直接連係させて表現したものである。許綏『唐詩史』下冊（江蘇教育出版社、一九九四）参照。

一五 中国社会科学院文学研究所繪纂『唐代文学史』下（人民文学出版社、一九九五）三三七頁に次の指摘がある。「当然、要

是他完全不理政事的话、也不可能由窮而達。看来姚合一方面嗜酒吟詩、賞花種竹、另一方面還是積極参与政治活動的、只不過後一個方面在他的詩里很少得到反映、他的詩反復描写的几乎總是前一個方面、也就是說明他的愛好始終是這些。」

一六 姚合の作品で、現実社会を反映する詩と見なせるのは、「莊居野行」詩くらいしかない。

一七 伝統的文学観が、安史の乱を体験した杜甫、王維、劉長卿などの詩人たちの内部ですでに崩壊の兆しを見せていたことは十分に考えられる。とは言え、彼らが青年期あるいはその前半生において、一度は文学の社会的効用性を信じ、その信念に基づいて作詩したことも事実である。注一六で指摘したように、姚合には社会を意識した作品がほとんどないが、これは、姚合の国家と文学とに対する意識が、彼以前の詩人と比べてより後者にその比重を移してきていることと関係があると思われる。（作新学院女子短期大学）